この人に会いました

NPO法人ネージュ　代表

稲治大介 さん

プロフィール

昭和41年8月26日生まれの44歳です。

大阪で生まれ育ち、大学卒業後は東京の会社で営業マンとして10年間働いていました。

２００６年にＮＰＯ法人ネージュを設立、冬季は「障がい者スキースクール・ネージュ」、２００８年からは通年でノルディックウォークやネイチャーウォッチング、スノーシューなど展開する「ＹＯＣ湯沢アウトドアセンター」を開始し、今年で５年目を迎えました。町の皆様から応援していただけるおかげで、年々ゲストは増えています。

なぜ障がい者スキーを？

会社員の時、障がいの方々による演劇のボランティアに参加しました。公演を見に来ていた障がいのある子どもの介助の方から、「私たちが当たり前に、いつでも、どこでもできることを、この子たちがやるためには１カ月も前から準備しなければならない」という事を聞き愕然としたのです。自分が大好きな、誰でもできると思っているスキーが、当たり前にできない人がたくさんいる現実に何かしたい！と思ったことが原点です。

なぜ湯沢？

湯沢は新幹線も高速もあります。気温も比較的高く、ゲレンデへのアクセスも容易です。なかでもホームゲレンデの湯沢中里スキー場は、駐車場からも近く、やさしい斜面で、我々にとって活動しやすいスキー場ですね。

スキーは少しの工夫と適切な器具の選択、調整ができれば障がいがあってもできます。また、湯沢は四季を通して自然豊かでとても魅力のある町。障がいのあるなしに関係なく、一人でも多くの人に、スキーやアウトドアを通して、ハッピーになっていただきたいと思っています。これからもこの湯沢町でがんばってゆきますのでよろしくお願いします。

★インタビューを終えて

誰でも雪は楽しめると活動する稲治さん。人に対するやさしさと湯沢への暖かい愛情を感じました。多様なニーズの中で、湯沢の応援団としてこれからも頑張っていただきたいと思います。

広報常任委員会　森下昌次　田村正幸

編集後記

絆［きずな］

「箱根駅伝の感動から」

正月の箱根駅伝は早大が18年ぶりに総合優勝のテープを切った。山登りの5区とアンカーを務めた二人の4年生はこれが最初で最後の箱根路だったが、主力の選手の故障によって回ってきたチャンスでもあった。「自分は走れないはずだった。走れない選手の分も頑張った」と言う笑顔は感動を与えた。世の中には、いかに努力を重ねても報われないこともある。それでも挑み続け、努力し続ける大切さを教えられた。

やっと充分な降雪を迎え、スキー場も活気づく気配が見え初めてきたが、若者のスキー離れは一向に止まらず、厳しいスキーシーズンの幕開けとなったようだ。

兎年にちなんで「二兎を追うものは一兎をも得ず」といわれるように、何にでも飛びつくのではなく、今求められている観光客のニーズを的確に捉え、それに応えられるように、町民一丸となって地道な努力を重ねることが大切なことではないだろうか、箱根駅伝の選手のように。

広報委員　南雲　正

広報委員会
委員長　柿﨑直治
副委員長　森下昌次
南雲和夫・南雲　正・
田村正幸・宮田眞理子

編集
湯沢町議会
広報常任委員会